

令和4年度 第3回 女性・若者活躍推進会議 議事録

日 時 令和4年11月11日（金）10:00～12:00

会 場 仙台市役所2階 第一委員会室

出 席 者 【委 員】仙台市長、市民局長、健康福祉局長、子供未来局長、経済局長、教育長

【外部出席者】・仙台スピーカーズビューロー 川村 有紀 氏

・認定NPO法人STORIA 代表理事 佐々木 綾子 氏

・NPO法人mia forza 代表理事 門間 尚子 氏

事 務 局 市民局次長、同局市民活躍推進部長、同部男女共同参画課長、同課主幹、同課担当者

次 第

1 開会

2 市長挨拶

3 出席者紹介

4 意見交換

5 その他

6 閉会

1 開会

○男女共同参画課長

- ・ただ今より、令和4年度第3回女性・若者活躍推進会議を開催する。

2 市長挨拶

○男女共同参画課長

- ・はじめに、当会議の座長である郡市長よりご挨拶申し上げます。

○市長

- ・本日はお忙しい中、女性・若者活躍推進会議にご参加いただき、感謝申し上げます。一時期と比べれば新型コロナウイルス感染症の勢いは落ち着いているところだが、このところ少しずつ感染者が増えはじめており、気を抜かず、換気など感染対策を行いながら進めてまいりたい。
- ・会議に先立ち、私がどのような想いでこの会議を立ち上げたのかについてお話しさせていただく。
- ・コロナ禍を契機として、市民生活や経済活動が制限され、そのことが市民活動や協働が盛んな仙台市の活力に大きな影を落とした。このような状況だからこそ、市民一人ひとりのエンパワメントを図り、みんなが活躍し、笑顔になれるまちを創ることが必要だと強く思っている。
- ・一方で、今この時、困難を抱えている方には、地域や社会の中での居場所と安心して暮らせる環境が必要であり、そのために市として改めて支援のあり方を考え、対策を講じることが喫緊の課題であると認識している。
- ・とりわけ、女性や若者が、コロナ禍でさらに厳しい状況にあるものと受け止めていることから、この「女性・若者活躍推進会議」を立ち上げた。女性や若者の支援に携わる方々と率直な意見交換を進めることで、本市として何をすべきなのかを明確化していきたい。
- ・今年度これまで2回の会議を開催し、支援に携わる皆様から多くの知見をいただいた。困難を抱える女性や若者の実情が明らかになるにつけ、本当に厳しい現状が見えてきたものと実感している。
- ・本日は今年度最後の会議となる。今回は、ひとり親家庭への支援、アウトリーチ支援、ピアサポートを主なテーマとして、それらの支援に実際に携わっておられる皆様にご参加いただいたところである。
- ・限られた時間ではあるが、是非とも皆様のお力添えを頂き、自由闊達で実りの多い意見交換の場にできればと思う。

3 出席者紹介

○男女共同参画課長

- ・次に、本日の出席者をご紹介します。はじめに参加団体の皆様を名簿順にご紹介する。
- ・仙台スピーカーズビューローの川村 有紀様。仙台スピーカーズビューローは、精神疾患や精神障害を理由に受ける差別や偏見・誤解の解消のため、精神障害当事者が自らの経験や思いを講演することなどにより、精神保健福祉に対する正しい知識の普及を行っている団体である。
- ・認定NPO法人STORIA 代表理事の佐々木 綾子様。認定NPO法人STORIAは、ひとり親家庭を対象としたアウトリーチ支援、困難を抱える子どもの居場所事業、支援対象児童などの見守り

強化事業など、ひとり親と子どもを主な対象に困難な状況にある家庭への支援を幅広く行っている団体である。

- ・NPO 法人 mia forza 代表理事の門間 尚子様。なお、本日出席予定だった横山 英子様は都合により欠席となっている。NPO 法人 mia forza は、暮らしに困難を抱える女性や子どもの支援、女性や子どもを応援する担い手の育成、NPO 等で活動する方のハラスメント相談などに取り組まれている団体である。代表の門間様は長年にわたり女性支援や子ども食堂事業に携わってこられている。
- ・続いて、市の出席者をご紹介します。

《市長及び参加局長等について役職と名前を順番に紹介》

- ・それではここからは、座長である市長が進行する。

4 意見交換

○市長

- ・それでは次第の4、意見交換に入る。
- ・まず参加団体の皆様から日頃活動されている中で課題と感じていることについて、それぞれご説明いただき、その課題等について市から質問をさせていただく。その後にフリーの意見交換とさせていただきます。
- ・仙台スピーカーズビューローさんからお願いします。

○仙台スピーカーズビューロー 川村氏

- ・精神障害のピアサポートについてお話しをさせていただく。
- ・10代の時に精神疾患の診断を受け、身体も心も思うようにならず、一時は学ぶことや新しい友達を作ること、仕事や結婚なども諦めなければならなかったと思っていた。
- ・念願の一人暮らしを始めたころに仙台スピーカーズビューローと出会った。仙台スピーカーズビューローでは、精神障害ゆえに受ける偏見や差別の解消を目的とした当事者による講演活動を行っており、この活動で同病の仲間たちとたくさん出会った。病気ゆえに大切にしているものを手放さなければならぬ切なさや悔しさ、薬の副作用や症状によって起こる身体の不調や変化などの困難を抱えつつも、この出会いにより新しい人生の生き直しを得られた。
- ・仙台スピーカーズビューローが出来たのは今から13年前だが、仙台市にはもっと前から当事者活動が行われており、現在も自助グループという形で続いている。
- ・精神障害というのは、周囲の偏見などにより自分自身が病気であることを開示しにくく、また開示したことにより元々の関係が破綻してしまうことも珍しくない。それゆえに社会からの孤立や孤独を感じやすい、関係性の病だと思う。なので、患者同士が病気や障害の経験を分かち合うことは、当事者本人の孤立感を和らげる、大事な役目だと思う。
- ・ひとたび精神障害者となると、する側される側、という一方向の関係性になりやすい。例えば、支援する側される側、管理する側される側、保護する側される側、など。一方向の関係性が続くと人はパワーレスになっていき、自己肯定感や自尊感情の低下が起こる。そこで、同病の仲間と語り合い助け合うことで、自分が誰かに必要とされているという感覚を得ることがで

きる。

- ・私が当事者活動に参加し始めたとき、周りの人たちが自分の病気のことをオープンに話していることに驚いた。話を聞いているうちに、私もそういうことがあったなど、だんだんと心を寄せられるようになり、自然と自分の経験を仲間に話し、たくさん聞いてもらった。そのうちに、今病の最中にいて苦しんでいる人に自分の経験を届けたいと思うようになり、これまで様々な立場の方々への講演や交流の機会に自分の経験を届けてきた。
- ・病の最中にある当事者やその家族にメッセージを届ける際、相手から元気をもらうこともあった。誰かからもらった元気を別な方におすそ分けする、そんな当事者活動の10年だった。
- ・ピアサポートの出発点は「分かること」「共通」だが、関係性は揺らぎ、移ろっていく。分からなさや違いに出会い、時に対立になることもある。互いの思いと経験を差し出し合い、成長しあえば、と思う。
- ・ピアサポートと新たな生き方は絶えず循環し伝染していくものだと思う。これは先ほど市長がおっしゃったエンパワーメントということにつながると思う。ピアサポートは、持ちつ持たれつだとかお互い様という言葉で、日常の中に既にあるもの。こういった双方向の関係性を育んでいくことが市民の力を上げていくことになるのではないかと思う。ピアサポートの力を市民が上手に活用して市民の力を上げていくことができれば、と考えている。

○市長

- ・社会における精神疾患に対する偏見や誤解の解消に向けて日々活動いただいていることに敬意を表する。
- ・する側される側の区別を乗り越えた、相互理解の大切さをお話しいただいた。お互い様の関係性を育むことが市民の力にもつながる、といったお話だったと思う。
- ・若者や女性のこれまでの環境を切り開いていくために、行政の支援を届けていくために何が必要と思われるのかお聞かせいただきたい。

○仙台スピーカーズビューロー 川村氏

- ・以前障害者の相談支援事業所で勤務しており、その時に区役所の保健師さんや相談員の方と一緒に訪問に行ったり相談を受けたりしたことがあった。そういったことも、行政と協働して支援を必要な方に届けていく形だと思う。
- ・また、仙台市の精神保健福祉審議会や自立支援協議会の委員もしているが、そのような形で、市で開催する会議を通して、行政と当事者、様々な立場の委員が協働して支援を届けていくこと、直接的な支援ではないかもしれないと一緒に政策を考えていくことも、支援を届けることになると考えている。

○市長

- ・後ほど改めてディスカッションさせていただく。
- ・次に、認定NPO法人STORIAさんをお願いする。

○認定NPO法人STORIA 佐々木氏

- ・事業をやっていく中での現状や課題についてお話しさせていただく。
- ・経済的、精神的に様々な困難を抱える親御さんとお子さん双方を包摂する事業を行っている。保護者については、昨年度から仙台市と一緒に、孤立する家庭を出さないためのアウトリーチ型相談支援事業を行っている。現在1,000世帯とつながりがあり、昨年度の相談件数は5,000

件以上だった。子どもについては、子どもの生きるを支える、育むサードプレイス事業を自主事業で行っており、地域の自治会や民生委員、企業と連携しながら行っている。お子さんに対し、学びや食育、体験学習などの家庭の代替機能を担う支援である。

- そのほか、仙台市からの委託事業で虐待リスクのある家庭を見守る事業や、自主事業として年間2,000世帯への食品のお届けなども行っている。
- コロナ禍でのひとり親やお子さんの現状についてお話をさせていただく。もともと困窮にあった家庭がさらに苦境に立たされているが、昨今の物価高が大きな追い打ちをかけており、相談の中では、食事の回数やお風呂の回数を減らしている、暖房を付けられない、などの相談が来ている。
- 相談を受ける家庭は、経済的な問題のみならず、就労、離婚、養育費、教育費、病気などの様々な問題が複合的に絡み合っているのが実情である。本人たちも、どこから説明や相談をしたらいいのか、どこから解決したらいいのか、ご自身でも分からない状況にある。私たちの相談支援事業の中では、整理がつかなくても大丈夫、気持ちを話すだけでも大丈夫なので是非相談してください、ということで、アウトリーチ型でそういった家庭に我々から声を拾いに伺っている。
- 事例として、「ひとり親で子育てに限界、小学生の子どもと暮らしているが身近に相談できる人や頼れる人がいない、死ぬにも死ねず苦しい、お金もないため生きているのがつらいだけ」といったお悩みも少なくない。
- 先週末も命に関わる重いケースが2件あった。ニュースにはならないが、氷山の一角だと思っている。
- 物価高により、親御さんとお子さんの精神状態や体の状態はさらに悪化していだろうと予測している。
- 課題として二つある。一つは、子育てについて、家庭の責任だという世の中の風潮があり、家庭に担わせてしまっている現状があると思っている。母子世帯の仕事と育児、生活時間の国際比較という調査があり、日本、アメリカ、ヨーロッパ10か国の計12か国の中で日本が一番働くことに時間を費やしているとの調査結果が出ている。子どもと触れ合う時間や体を休める時間がない中で保護者や子どもから精神的な余裕が失われるのは当然だと思っている。
- ダブルワーク、トリプルワークしているうちに心が病んでしまう。ある調査では、ひとり親の三分之一がうつ状態あるいはうつ状態予備軍と言われている。
- このような環境の中で、子どもは子どもらしさを失っていき、寂しいだとか素直な欲求を表現するのが難しくなっていく。そんな中で親子の気持ちのすれ違いや関係性が悪くなることもある。
- 二つ目の課題として、人間形成の土台となる乳幼児期や就学時に、親との関わりや多様な経験を通して自己肯定感や自己効力感、相手を信頼する心が育まれるが、子どもと接する時間や多様な機会を経験することが少ないひとり親にはそれが難しくなっている。
- 夕食を一緒に取ることは当たり前の日常だと思うがそれすら難しい状況であったり、クリスマスやお正月など家族が団らんする季節の行事が困難であったり、多様な体験や人との出会い、当たり前の日常や非日常的な体験が奪われているという状況。
- 自分は大切な存在であるという気持ちが失われていくことで、将来の希望の諦めや無気力など

の心の状態に変化していってしまう。

- ・そういった家庭を見つけていく、つながっていく、支える、見守り続ける、これら一連の事業が今後必要と考えトライしているところ。

○市長

- ・アウトリーチや居場所などを通じて、困難を抱えたひとり親家庭やそのお子さんたちに寄り添った支援に取り組まれていること、心から敬意を表したい。
- ・次に、NPO 法人 mia forza さんをお願いしたい。

○NPO 法人 mia forza 門間氏

- ・当法人は専従スタッフがおらず、全員がボランティアである。自治体の職員もボランティアや会員として支えてくれている。例えば子どもの居場所事業では現役の教諭が入っている。
- ・毎週金曜日に行っている中学生の学習支援について、仙台市も施策として無料の学習支援を市内各所で行っているが、お母さんやお子さんたちから児童扶養手当全額支給でないと通えないという声があり、民間の基金の助成金を使い、利用制限なしで展開している。中学校や高校の教諭や塾の経営者、カウンセラーがアドバイザーに入って運営している。
- ・当法人では当事者の声から事業を立てるようにしている。一番お困りの方の視点で事業を考え、10年後20年後30年後を見据えていく姿勢で取り組んでいる。
- ・STORIA さんからも話があったが、コロナ禍でこれまでお困りの方の困窮がさらに進み、すそ野がさらに広がってしまったこともあり、今年4月から、毎月ひとり親世帯の皆さんのお声をこまめに伺ってきた。この声を、自治体の皆様、特に県内の自治体の皆様にこれからの施策に活かしていただきたいと考えている。毎月異なるテーマで伺っている。本日、その一部をお持ちしたが、こういったことにお困りかが分かると思う。全国のひとり親の団体と連携しながら、仙台や宮城の状況を全国に発信するとともに全国の官民で進められている取り組みを学び活動や地域に活かしていきたい。
- ・性暴力や暴力被害に遭った子どもたちや女性のシェルターを運営している。自治体の補助金は一切いただけない。
- ・加害者は今まで通りの生活環境で暮らしているのに、被害に遭った方は生活環境が変わってしまう。このような状況を辛く思い、これまでの保護施設という考え方を突破したいと思い立ち上げた。シェルターを立ち上げる前に北欧に視察に行き、北欧の施設のあり方を学んできたことも活かした施設となっている。お見せ出来ないのが残念だが、大変おしゃれで窓も大きく明るく開放的なシェルターとなっている。そういった環境を整えることで、自己肯定感の回復に役立っている。
- ・障害のある皆さんや少年院・女子少年院との連携も行っている。食料提供のフードパントリーの準備を女子少年院の中で行っている。また、刑務所の中で様々な製品を作っているが、それを積極的に買い取り、ひとり親世帯や困窮世帯にお届けしている。福祉作業所の製品についても同様である。
- ・農業を始めて間もない有機無農薬の農家さんからも、買い取りをして提供している。
- ・これらの活動は、子どもたちや女性の命に携わる活動と捉えている。一人でも多くの手を借りながら進めていくことが重要と考えており、そうすることで社会全体にこういう問題があるの

だということを一人でも多くの方と考えていくことができるのではないかと考えている。

- ・仙台市は令和10年で人口がピークに達し、その後人口が減っていくと拝見した。人口が減っていけば財源も減り、自治体職員の人数も減っていき、今まで当たり前を受けられたサービスも受けられなくなっていく。ここを見越して、これからの6年で市民力を底上げしていかなければならない。誰か一人だけが良くなれば、私の子どもだけが良くなれば、という考え方では無理な世の中になっていく。企業や生産者、地域の皆さんとの連携を重視して事業を進めている。
- ・たとえば、性暴力の被害に遭った方のためのワンストップセンターも財源の問題で運営していくことが厳しくなると思うが、これからの6年の間に基盤を作り、財源として企業の力を借りていけないかと考えている。
- ・道路やライフラインの老朽化が進んでいくためそちらに予算を割かなければならず、子どもや福祉の方にお金を割くことが厳しくなっていくのではないかと考えている。郡市長が在任の間に、これからの10年・20年先の仙台市や子どもたちのことを考え、子どもたちを応援するような財団的組織を立ち上げていただきたい。その組織の中で、子どもたちを応援するための基金作りを官民一緒に進めていきたい。
- ・女性や若者を応援する民間のNPOは増えてきた。私が活動を始めて25年くらいになるが、その当時は数えるほどしか団体はなかった。企業も子どもや若者の応援に関心を示している。この機会に、経済局のお力添えをいただきながら、子どもや若者を応援する組織をお考えいただけないだろうか。

○市長

- ・市に対して大きな提言をいただいたことに感謝申し上げます。
- ・市民力をいかに上げていくのかということについて、様々な取り組みをいただけていることに心強く思った。
- ・これより意見交換をさせていただく。
- ・仙台スピーカーズビューローの川村さんより、市民がそれぞれ力を底上げしていくことがより良い支援につながっていくといった趣旨のお話をいただいた。このあたりについて健康福祉局長はいかがか。

○健康福祉局長

- ・ピアサポートは精神保健以外の分野でも、市民力という目線でも活用できるということを伺った。行政サイドとして、ピアサポートが押し付けにならないように市民の皆さまに理解していただく上で気を付けなければならないことがあれば教えていただきたい。

○仙台スピーカーズビューロー 川村氏

- ・もう既にあるものを活かしていくことが良いと思う。精神保健福祉審議会でもピアサポートの活用について議論しているところだが、ピアサポートの活用に目が向いてきたことは良いことだと思っている。
- ・ピアサポートの活用はすごく大事なことで、ある意味当たり前のことでもあるが、それを目的やゴールにしてしまうと違うと思う。共感はあるまでも出発点で、そのあとに分かり合えなさや違和感も経験していくことになる。分からないことや違いを受け入れていくことがピアサポートの中で一番大事なところだと思う。分かることは安心につながるが、分からないことや違

いが出てきたときにそれを受け入れる力を付けていくことが、今後ピアサポートに求められていることだと思う。

○市長

- ・どうしてもする側される側のくくりはあって、行政がいろんなことに介入していくうえで気を付けなくてはいけないところはあると思っている。力を付けていくために何が必要なのかということについて、これからも教えていただければありがたい。
- ・他の局長から質問はいかがか。

○子供未来局長

- ・ピアサポートを目的にしてはいけないというお話は、なるほどと思った。ピアサポートがあちこちに生まれることは、困っている皆さんのエンパワーメントにつながっていく大事な取り組みだと思っている。
- ・子供未来局では現在ヤングケアラーの方々を対象にしたピアサポートを始めたところ。自覚がないまま当たり前のようにケアをしたり、また、大人びているお子さんが多いとも感じており、子どもらしさを失ったまま成長していくことで後から影響がでてくることのあるのではと懸念している。ヤングケアラーの方々に対してピアサポートの取り入れ方のヒントをいただければありがたい。

○仙台スピーカーズビューロー 川村氏

- ・仙台市ではない別な自治体でスクールソーシャルワーカーを行っており、ヤングケアラーという言葉をよく聞くようになった。実際に関わる児童生徒の中にも疑いがある子どもたちが増えてきたと感じる。ただ、おそらく昔からあったことで、最近取り上げられてきたのだと思う。
- ・ヤングケアラーのピアサポートという言葉もよく聞くようになり、様々な場所で研修などが開催されている一方で、ヤングケアラーの場合は、自分自身がケアラーであるという認識、自分が他の子どもたちと置かれている状況が違うという認識が低く、また子どもらしい経験が少ないため、子どもの経験を安心してしっかりとできる場があると良いと思う。
- ・ピアサポートは双方向の関係を追い求めるものではあるが、ヤングケアラーやそれを経験した大人については、まず安心して受けられる環境を整えることが大事。その先に同じ経験をした人たち同士でのピアサポートがあると思う。同時進行はできるのかもしれないが、まずは子ども時代を安心して作れることが大事だと思うため、それを受けるサポート体制が充実すると良いな、と思う。

○市長

- ・ヤングケアラーについて、STORIAの佐々木さんから、お母さんの状況について子どもたちが非常に気を使って心配をしながら生活をしているとの話があった。ある意味これもヤングケアラーであると思う。議論に通じることがあったと思うが、どのようにお感じになっているのか、また、ひとり親家庭に行政としてどのような支援を率先して取り組むべきなのか、佐々木さんに伺いたい。

○認定NPO法人STORIA 佐々木氏

- ・ヤングケアラーという言葉は今クローズアップされてきたが、以前からあるお話だと思っている。支援している家庭にも一定数いるほか、アセスメントを取っていると、放っておいたらそうになってしまうだろうと思われる家庭があることも感じている。

- ・ヤングケアラーは、先ほど仙台スピーカーズビューローの川村さんからあった通り当事者の認識の部分、それが当たり前という生活の中で認識されないことが大きな問題だと思っている。ただ、ヤングケアラーであることだけにフォーカスするのではなく、そうせざるを得ない背景が家庭にあるというところを前提において、家庭とお子さんに双方向でどのような支援をしていくことが家庭全体をサポートすることにつながるのか、という視点が大事だと思っている。
- ・ヤングケアラーのお子さんに近づくにも、保護者の承諾の必要や個人情報の問題などもあるため、学校でも NPO でも、まずはつながっているところをきっかけにしながら、どういったソーシャルワークをしていくことがその家庭にとって良いのか、といった、全方位で考えることが必要だと思っている。
- ・ヤングケアラーというレッテルはあまり貼りたくないと思っている。自分がヤングケアラーだと思ってしまうと悲しくなってしまうと思う。同じ目線で子どもの気持ちを大切にしながらゆっくり対話しながらやっていきたいと思っている。

○市長

- ・学校現場でも通ずる部分があると思うが、教育長はいかがか。

○教育長

- ・学校に来ている児童生徒でなんらかの気づきを捉えることが大事だと思っている。そのために教職員のスキルを上げていく研修などを行っており、気づいた時に早くつなげていくため、スクールソーシャルワーカーと連携しながら対応しているが、学校現場だけでなんとかならないのが現実である。学校現場として、気にかけるべきところ、やるべきことがもしあれば教えてほしい。

○認定 NPO 法人 STORIA 佐々木氏

- ・ヤングケアラーとはそもそもどういった状態なのか、先生方で認識合わせすることが大事だと思う。例えば、家のお手伝いをしていると聞くと、えらいね、で終わってしまうが、その背景に、勉強する時間や遊ぶ時間を削ってしまっているかもしれない。本来、大人がしなければならぬことを子どもがケアをしていたらヤングケアラーだと言える。ヤングケアラーの知識を深めないと、えらいね、頑張っているね、大変だね、といった形で見過ごされてしまうことはあると思う。
- ・学校の研修で相談を促すチラシが配られたりするが、中高生の話から、配られると自分の家庭状況がバレるのではないかとドキドキして話せなくなるとの相談を受けたことがある。学校全体で学生・生徒に相談を促す研修が効果的なのか、先生方と相談しながら深く考えていければよいと思う。

○市長

- ・子どもの立場でどう感じるのかということについても言及いただいた。
- ・ひとり親家庭の支援をメインにされているということで、ダブルワーク、トリプルワークをされているお母さんたちへの支援について、忙しければ忙しいだけ支援に結びつかないということもあると思うが、どのようにアプローチしていくべきなのか、お教えいただきたい。

○認定 NPO 法人 STORIA 佐々木氏

- ・二つ挙げたい。一つ目として、仙台市と連携し行っているメールを主軸とした相談支援窓口は

とてもニーズがある。24時間受け付けており、多くは夜中にメールが入ってくるため次の日のお返しとなる。物理的にも精神的にも相談の敷居を下げる工夫が必要だと思っている。いつでも、行かなくても、顔が見えなくても、名乗らなくてもいいというのはとてもハードルが低い。そういったメール相談や、自主事業としてはLINEも行っており、テキストでの相談が有効だと感じている。そのあとにコミュニケーションの中で名前をお聞きして課題解決に向かっていく、といったケースが多い。

- ・二つ目として、サードプレイス事業については、家庭の代替機能を果たす役目があると思っている。また、地域の中で、困っていそうな家庭を見て、どうしたらいいかわからない時に、子どもの団体に連絡をいただきサードプレイス事業をご紹介するケースも多い。来所型が難しい場合訪問することもできるため、学校に行けないお子さんに対して訪問型のサードプレイスを提供するといったことを自主的に行っている。地域からのアウトリーチも重要だと思っている。

○市長

- ・他の局長から質問はあるか。

○子供未来局長

- ・コロナ禍や物価高の中でお困りのご家庭のケースをお教えいただき、改めて胸が痛む思いだった。ひとり親家庭の方々は、頑張れば頑張るほどお子さんに関わる時間が取れなくなっていくということで、さらに苦しさが増していくということを何とかしなければと思っている。
- ・サードプレイス事業の中で、お子さんの可能性を見出してそこを引き上げていく取り組みをなさっているが、居場所づくりをするにあたってどういう手法が効果的なのか、またどういうことを目指していくのか伺いたい。

○認定NPO法人STORIA 佐々木氏

- ・お子さんたちの可能性を切り開いていく、これは本当であればご家庭でのやり取りの中で自己肯定感や自己効力感として育まれるが、そういった経験や環境が親御さんも心苦しいながらも取れない家庭の代替機能と考えている。コンテンツとしては、お子さんが家族のだんらんを味わえるような、大人と一緒にご飯を作るだとかの日常的に当たり前の経験や、例えば科学館と一緒に行くなどの非日常の経験など。大切なのは、信頼できる大人と子どもとの関係性。コントロールされない、ありのままを認めてくれる自然な愛ある関係性と、人間形成の土台作りとなる多様な機会を提供している。
- ・目指すところは、すべてのお子さんが自分らしく幸せに生きていくこと。すべてのお子さんのウェルビーイングを目指しながら、その手前にある進学や就職などの自立をしていくプロセスの支援、さらにその手前にある自己肯定感をご家庭と一緒に育んでいくことが大事だと思う。

○市長

- ・mia forzaの門間さんからもお話を伺いたい。ひとり親家庭の調査についてはその後の活動に結びつけるシナリオ作りの基本になるものだと思うが、かなり頻回に行っているのか。

○NPO法人mia forza 門間氏

- ・当法人につながられているひとり親世帯の方のうち、40世帯に調査のご協力いただき、毎月10～20項目のアンケートをさせていただいている。アンケートのほか、個別の面談や家庭訪問を通して、親御さんだけではなくお子さんにもお話を聞くなどをして、多面的にひとり親世帯

の声を伺っている。本日お持ちしたデータはその一部。ヤングケアラーの声も入っている
ので、ご覧いただければと思う。

○市長

- ・課題を聞き、それを経済界や他団体につないでいくこともなさっているとのことだが、どうい
う必要性があって行っているのか、またその効果についてお聞かせいただきたい。

○NPO 法人 mia forza 門間氏

- ・NPO でも、子どもや環境など分野があり、これまでは分野間の連携が希薄だった。このコロナ
禍で社会における問題が深刻化しており、一つの分野だけでは解決が見込めないことが見えて
きた。これは自治体・行政の皆さんも肌で感じておられると思う。今直面している問題・課題
は、これまでの分野ごとや縦割りでは超えられないと感じ、異分野のNPOや地域、学校、自治
体、企業、生産者、宗教法人などにお声がけし、取り組んできた。最初にお声がけした先は少
ないが、そこから口コミで広がってきている。
- ・例えば企業にお話をし、ボランティアや資金、物品の提供をいただくと、その企業の営業の方
や取締役の方が他の企業にCSRの一環としてお話をしてくださり、次の企業がつながる、とい
った流れが生まれてきている。他の団体でもそういったつながりが生まれてきているのではな
いかと思う。
- ・自治体や学校も同様で、例えば一つの学校とつながると、先生が他の学校の先生にお話をさ
れ、その学校からも相談がきたりする。なお、相談を受けた際には、当法人単独ではなく複
数のNPOと連携して関わらせていただくようにしている。相談もそうだが、一つしか窓口の情
報を提供しなかった場合、その窓口と合わなかった場合、行き場を失ってしまう可能性があ
る。一つだけではなく複数の選択肢を提示することで、官民や分野を超えたつながりがどん
どん広がっていつている。

○市長

- ・市民局長は、どのように感じ、市民局としてどのように取り組んでいくべきと考えているのか
伺う。

○市民局長

- ・市民局では今、困難な女性に対するアウトリーチを積極的に進めており、私自身も現場に行っ
てみた。気づいているのに声が出せない場合であれば行政の窓口のハードルが高いということ
であるため、そのハードルを下げる取り組みを行っているが、難しいのは、本人が気づいてい
ないところへのアプローチである。
- ・先ほどSTORIAの佐々木さんから話があった通り、ヤングケアラーのお子さんたちに対するア
プローチは親の承諾を得なければならないなどセンシティブで、かつ自分の置かれている状況
が分からないというお話だったが、同様に若い女性も自分が困難な状況にあるということを持
理解されていない。そこに対するアプローチはどうしたらいいか。

○NPO 法人 mia forza 門間氏

- ・主語が子どもや女性と変われど、ご本人が気づいていない中どう情報を届けたらいいのか、と
ご質問をいただくことが多い。
- ・例えば、ひとり親世帯の方や困難を抱えていらっしゃる方に郵便で情報やご案内を送っても回
答が返ってこない、よく自治体から相談いただく。せんだい男女共同参画財団さんから若年

女性に向けたアンケートについて相談いただいた際には、封筒を開けたくなるような封筒の様式や表記の工夫とアンケートに答えたいようなご案内の工夫についてご提案させていただきました。その結果アンケートの回収率が上がったとのことだった。ほかの自治体にも同様にこのようなご提案をしている。

- ・ 予防が非常に重要だと思っており、誰しも困難な状況に陥ることがあるのだという視点を持って、仕組み作りをしていかなければならない。例えば、仙台市に転入されてきた方、婚姻届をお持ちになった方に、万が一困難な状況になったら、ということで相談窓口の情報をお渡ししておいた方がよい。なくされるかもしれないし、相談窓口とは無縁の生活を送られるかもしれないが、まずは予防としてお渡ししていくことが必要。
- ・ 市営住宅に入るときにも、ごみの出し方などの他に、わかりやすく活用しやすい様式の相談窓口の一覧をお渡ししたほうがよい。
- ・ 出生届をお持ちになった方には、子どもについてだとか夫婦間・家庭内でお困りになった際の相談先リストをお渡ししたほうがよい。もちろんそこには、子どもの居場所や子ども食堂、のびすくなどの情報、それぞれがどんなことを行っているかとか、どんな相談でもいいよ、というような情報を少し詳しく記載していただけたらと思う。予防として情報をわかりやすく受け取りやすい形でお渡ししておくことが重要である。
- ・ 困難な状況に気づいていない方に対しては、一人にせず、繰り返し複数の多面的なつながりを持つことが重要となる。気持ちへの寄り添いが多方面からあることにより、ご自身が本当はつらく感じているということに気づききっかけになる。困難な状況にあると、自分が困難だとか辛いということに気がつかない場合もあるし、また、状況を直視することでバランスを失うかもしれない、失うのであれば防衛本能として見ない、ということもある。
- ・ せんだい男女共同参画財団さんが行っているようないろんなイベントにいらっしゃった方には、あまり勢いづいても逃げられてしまうかもしれないが、ご縁を大切に、繋いだ手を離さず、一方向だけではなく多面的に多方向からつながりを作っていくことが重要。それにより、時間はかかるかもしれないが、ご自身が自ら状況に気づき、いくつものところとつながることにより解決の道しるべを得やすくなるのではないだろうか。
- ・ 改善や解決に向かった後の方が人生は長い。そこに寄り添う仕組みがどの分野も少ない。不登校やいじめは、解決や学校卒業が終わりではない。自死やその未遂をされた方はいじめや不登校の経験をされた方が非常に多い。その経験をされた方が、成人を迎えた後もつながれるような仕組みもこれからは求められる。

○市民局長

- ・ せんだい男女共同参画財団のアンケートで封筒についてアドバイスをいただき、回答率の上昇につながった。
- ・ つかんだ手を離さない点について、当局では出張相談会を行っているが、相談ブースをはしごして自分に合った支援団体を選べるのが非常に良いらしい。手ごたえを感じているため、深掘りしていきたいと考えている
- ・ ハラスメントに関する報告書についてもお教えいただきたい。

○NPO 法人 mia forza 門間氏

- ・ NPO やボランティア団体は、良き人が集まって良き行いをしているところ、というイメージを

お持ちの方が多いかもかもしれないが、そこでもいじめや嫌がらせ、ハラスメントが起きている。

- ・私は、7年ほど子ども食堂に関わらせていただいていたが、この間、全国のこどもの居場所を運営している団体さんからさまざまなご相談を受けてきた。その中には、深刻なハラスメントのご相談がいくつかあった。ここ数年間は、子ども食堂をはじめこどもの居場所が急激に増えた時期でもあるが、この数年の中で、非常に重篤なハラスメントが相次いだ。例えば団体の代表理事が利用しているお子さんの保護者に性的な暴力を行ったとか、教育の現場にいらっしやった方々が立ち上げた団体で子どもたちへ体罰が行われた、など。
- ・今後、公的なサービスがどんどん手薄になってきたときに、市民同士の支えが重要になってくる。今後ボランティアやNPOに参加される方は今以上に増えてくると思う。その時に、安心して安全にお力を発揮していただくためには、NPOやボランティア分野におけるハラスメントをなくさなければいけないと思う。
- ・企業には制度的にハラスメントの防止規定があるが、多くの方が無償で活動する雇用関係のないNPOやボランティア団体においては防止する仕組みがなかった。NPOやボランティアの社会における役割は非常に大きいと感じているため、こういったハラスメント問題が起きたときに、団体が解散したり、被害者が辞めたりして、何もなかったことにしても何ひとつとして良くならないと思った。
- ・全国的に、ハラスメントに取り組む先進的な団体さんにヒアリングをし、6月にシンポジウムを行った。私たちは、加害者を糾弾するのではなく、ハラスメントを生まない風土づくりを全国で進めていく。各地域に、弁護士や社労士、ドクターなどの専門家やボランティア協会、中間支援組織などとの連携による相談窓口を設置するほか、担い手育成や、ハラスメントに対応にあたる方々の横のつながり形成、これらを東北6県と全国で展開していく予定である。

○市長

- ・最前線で取り組まれているからこそのお話をいただいた。

5 その他

○市長

- ・これ以降は挙手によってご発言いただきたい。団体の皆さんから市へのご意見でも、団体の皆さんの間での意見交換でも、局長が深堀りしたい点などでも、フリーで意見交換していきたい。

○経済局長

- ・mia forzaの門間さんに伺いたい。企業の支援について、企業側にとっても若者や子どもたちの支援に関心があると伺ったが、企業側にとってのインセンティブは何か。

○NPO 法人 mia forza 門間氏

- ・子ども食堂時代に、夏休み明けに自死や不登校のお子さんが増えるということ踏まえ、学校や地域以外にも子どもたちの居場所があるということ広く伝えたくて、河北新報さんにお力添えをいただき新聞の一面に宮城県内の子ども食堂さんのお名前を並べ、みんなおいでよ、待っているよ、という記事を掲載していただいた。費用は、企業のみなさんが出してくださった。河北新報社の営業の方々が動いてくださったが、その皆さんがおっしゃっていたのは、お話を持って行ったどの企業さんでも、素晴らしい、ぜひ応援させてほしいとの反応だったとの

こと。記事下部にお力添えいただいた企業さんのお名前を掲載していただいたが、それらの企業さんでも信頼感が増したとか、お褒めの言葉をいただいたなどの反応が、お客様や取引先からあったとのことだった。

- ・企業さんからの、社員教育の一環として社会貢献活動に社員を出したいとの相談をいただくことがある。企業にとっては、企業ブランドのイメージアップや広く豊かな企業イメージづくりに貢献できるということがあるようだ。
- ・フードロスについても、食品を処分するにもお金がかかるため、せっかく作ったものを循環させることが社会貢献にも役立つのであれば一石二鳥、ということで、企業さんからの食品のご提供が増えている。

○経済局長

- ・少子高齢化で生産労働人口が減少することにより、企業にとって人材確保が課題となってくるため、社会貢献やイメージアップに力を入れているということなのだろうと受け止めた。
- ・行政がそういったことを企業に働き掛けるとすれば何を期待するか教えていただきたい。

○NPO 法人 mia forza 門間氏

- ・仙台市が子どもや若者を応援していることを強く打ち出している市だということを経営との関わりの中で伝えることにより、例えば企業が仙台市と協働事業をする際、「仙台市は子ども・若者を応援しています」という一文が事業の何かに入っていくことで、企業自身も子ども・若者を応援している企業であることを謳いやすくなる。
- ・ホームページに「子ども・若者を応援している仙台市を当事業所は応援しています」などの文言が入ることにより企業のイメージも変わってくる可能性があるのでは。
- ・企業のパンフレットやホームページ、営業や社員の方の名刺に「子ども・若者を応援している仙台市と連携しています」だとか「子ども・若者を応援している仙台市から委託事業を受けています」という文言を入れることなどもあり得る。
- ・仙台市と企業のタイアップや連携の中でこのように切り出すことで、今まで消費者の方にお示していた顔と違う顔を見せていくことができるのではないだろうか。
- ・皆さん SDGs のバッジをつけているが、バッジの説明の際にも、「これからの未来、当社は子どもと若者の応援が必要と考えている」などの形で活用いただけることは企業にとってもプラスになると思う。

○市長

- ・本市もいろんなところと連携しているが、アピールの仕方にもう少し知恵を絞っていくべきだと感じた。
- ・そのほかにはいかがか。

○仙台スピーカーズビューロー 川村氏

- ・県外の別の場で、外国人の入管管理の問題と精神科の矯正医療について議論する場があり、その場で聞いたことだが、外国人であるがゆえの差別や精神障害者であるがゆえの差別についての人権擁護の取り組みとして、弁護士がただ事務所にいて待っていても、外国人も精神障害者もアクセスしない。行ったら莫大なお金を取られるのではないかと思われる。そのため、お話しした弁護士の方曰く、外国人のフェスティバルになどの場に弁護士が出向いてブースを設けるだとか、モスクなどの宗教施設に行き無料相談のブースを設けているとのこと。

- ・精神障害に関する不当な入院や不当な取り扱いなどの相談を誰に相談するかという話の中で、まず弁護士にはしないという話だったが、精神医療審査会にアクセスすることも敷居が高い。精神障害者が自分の人権を擁護するために弁護士とどう関係性を紡いでいくか、という話をしたことを思い出した。
- ・スクールソーシャルワーカーの活動に関して、仙台市は他の地域から見ると、社会資源が充実していて、手の届くところにいろんな支援があると思う。隙間はあると思うが、障害福祉の分野でも手に届くサービスがたくさんある。ただ、一歩市を出ると本当に乏しい。
- ・この地域でどうしよう、と思ったときに、街の良い人探しをしてみたことがある。自分自身で街を歩き、いろんなお店に入ったり近隣の方とお話ししたりする中で、見つけた良い人を自分の中で留めてマップ化した。それにより、貧困の家庭の支援に入ったときに、パン屋でパンの耳分けてもらえるから一緒に行こうとか、お肉屋さんでタイムセールやっているから一緒に行こうなどと活かすことができた。
- ・仙台市もまだ行き届いていないところがたくさんあると思う。そういうところに皆さんとともに目を向けていけたらと思う。フォーマルなものだけでなく、皆さんと資源を作っていったり見つけていったりしていきたい。

○市長

- ・仙台市内には、本日参加いただいている皆様をはじめ、様々な活動をされている NPO や団体の方が大勢いらっしゃる、協働のまち仙台ならではの強みが他と比べてあると思っている。
- ・行政のサービスとなると、敷居が高いと思われ、直接アクセスされるかということ必ずしもそうではないという問題意識を持っており、そこをどう克服していくかということで様々な取り組みをしていこうと強く思っているところ。
- ・良い人探しのマップについて、とても面白い取り組みだと思う。そういう形でいろんな方々を誘いこんでいくというのも一つの手だと思う。

○認定 NPO 法人 STORIA 佐々木氏

- ・3点ほどお話しさせていただく。まず市民力に関して、mia forza の門間さんのアイデアは素晴らしいと思い参考になったところ。また違ったアプローチで、STORIA には、無償で現場で子どもを支えてくれるボランティアさんと、全国から集まり社会人としての専門的なスキルにより経営の部分やプロジェクトを担ってくれるプロボノさんがいる。ボランティアが 200 名以上、プロボノが 40 名程度おり、金銭換算したら 950 万だった。財源がなくてもこういった形でご協力いただくことで事業が成り立っていく、こういった市民の力をお借りすることで新しい事業も作っていけるのではないかと思う。
- ・宮城県からも、仙台市と一緒にやった事業についての質問が多くある。協働のまちであり起業のまちでもある仙台なので、福祉の新しい事業にどんどんチャレンジしていく仙台であってほしい。そこで一つの事業のスキームができて、地域でカスタマイズは必要だとは思うが、宮城県内に広がっていき、一人でも多くの親御さんお子さんをサポートしていくことができる、そういった仙台であってほしい。
- ・企業との連携について、また違った部分での連携をしている。企業研修について、社会課題を知らなければいけないという企業のお考えや幹部候補育成ということでお話をいただく。企業の若い人材を幹部候補として育成するため、社会をどうやって変えていくかということにつ

と一緒に研修事業を作って提供していく、ということを行っている。

- ・システム会社と企業研修を行った。NPOがこれからあったほうがいいシステムとして、虐待を未然に防ぐためAIを使用しいち早く発見するシステムをトライアルで一緒に作っている。どれだけ世の中に出るのかは分からないが、企業が持っているアセットと社会で求められているものが掛け合わせり、新しい解決方法が出来ていくと良いと思う。

○市長

- ・企業にどういう形でアプローチしていくかというのは踏み込んで取り組んでいない分野でもあるため、今後考えていく点かなと認識しながら聞いていた。
- ・福祉の分野にチャレンジする皆さんたちについて、社会課題解決のための起業支援はこれまでも行っており、いろんな取り組みが広がってきており、心強いパートナーが次々生まれているまちでもあると思う。
- ・この度の女性・若者活躍推進会議は、なかなか支援に結びつかない、困難な状況に陥っている皆さんが確実に増えていることに胸を痛めながら、どういった支援の輪を届けていくべきなのか、ということについて、局長たちも直接皆様方のお話を聞かせていただくいい機会となっている。縦割りに聞こえるかもしれないが、それぞれの分野でどんな施策を生み出せるのか考えるいい機会だと捉えている。
- ・様々なご意見をいただいたが、何か他にご意見、仙台市に届けたいことなどあるか。

○仙台スピーカーズビューロー 川村氏

- ・お手元のチラシ、オープンスペースぽかぽかについて説明させていただく。仙台スピーカーズビューローではなく私個人として行っている。精神障害の当事者として、必要と感じて始めた。
- ・私は高校生の時に疾患の兆しがあり、土日に家にいづらい状況があり、街の安い喫茶店や公園などを転々とするしかなかった。たまたま悪の道に誘われることなどはなかったが、可能性は十分あったと思う。高校生が、日中ならまだしも夜に一人で街を歩くということは、そういうリスクをとっても抱えていると思う。
- ・スクールソーシャルワーカーの仕事をする中で、学校にも家庭にも居場所を見出せない子どもはたくさんいて、親世代にもいるかもしれないと思うようになりこの取り組みを始めた。
- ・その場に来て、誰かとおしゃべりして過ごすでも、お昼寝コーナーでお昼寝をしても、時間つぶしでも良い。食事を準備することが困難な方には、カップラーメンを50円で準備しているのでご利用いただければと思っている。
- ・戻れば大変な状況は変わらないかもしれないが、一時安心して過ごせる場所を目指している。前回1回目は、そんなに多くの方はいらっしゃらず私の知り合いがほとんどだった。2回目が今度の日曜日に開催される。お問い合わせをいくつかいただいております、県外から興味を持たれて問い合わせをされる方も。悩みを抱えて話したくて来る方もいれば、特に悩みはないが暇だから行ってみようかなという方も。特に年齢制限や参加する背景は問わないため、関心ある方や必要とされる方がいればお声がけいただければと思う。皆がいるところで話づらいという方に、1名限定で「あのねの時間」という、カウンセリングではないが一對一でわたしが一生懸命聞く時間を設けている。

○NPO 法人 mia forza 門間氏

- ・仙台市やNPO、立場が違えども、市民や地域の方の命に関わる、携わるということについて共通している。仕事や活動を通して、私たちはそれぞれのさまざまな立場から、常に誰かの命に関わらせていただいている。また、取り組んでいる分野は違えども、すべての取り組みは地続きだということを共通認識としてご一緒させていただきたい。
- ・私どもの法人は海外からもお力添えをいただいている。これはコロナ禍でオンラインでの活動が急激に進んだからこそできたこと。活動資金も一部海外からもいただいている。東日本大震災の際に仙台や宮城の被災した方たちを応援して下さった方たちが、東京や大阪、海外から、中心的な立場として力を貸してくださっている。
- ・仙台はNPOやボランティア業界では、素晴らしい力を発揮している方をたくさん輩出している街として知られている。仙台にいらっしゃらなくても仙台を思ってくれている方たちとつながりお力添えをいただきながら、取り組みを進めていただけたら、と思っている。

○市長

- ・2時間という時間があっという間に過ぎ、とても内容の濃い充実した時間だったと感じている。
- ・今年度の女性・若者活躍推進会議は今回の会議で終了となる。これまで3回の会議に計10団体の皆様にご参加いただきお話をお聞かせいただいた。とても多くのご示唆をいただき、この会議の目的を十二分に果たせたと感じている。
- ・ご多忙中、またコロナ禍という中であっても、呼びかけに応じていただいた皆様方に心から感謝申し上げます。
- ・支援団体の皆様と引き続き様々な場面で連携させていただきながら、このまちの未来を担っていく子どもたち、若者、そしてすべての方々が笑顔で過ごせるまちとなるために、なお一層頑張っている所存である。

6 閉会

○男女共同参画課長

- ・多くの視点に渡る様々な活発なご議論をいただき感謝申し上げます。
- ・以上をもって令和4年度第3回女性・若者活躍推進会議の一切を終了する。